アダムの肋骨とマーヴェルの庭（中編）※

吉　中　孝　志

【キーワード】十七世紀英文学・アンドリュー・マーヴェル・「庭」・英国十七世紀政治思想・女性観

今までの議論からも明らかなように、女性は男性の助け手として存在するという考え方は、家父長制のイデオロギーでは、女性が男性よりも劣った存在であるということを意味していた。そして、その助け手さえいなければよかったという表現は、同じイデオロギーをさらに強化した表現になっているわけである。マーヴェルが17世紀の半ばにこの家父長制の言説を繰り返した理由は、一つには既に始まっていた女性達の反家父長制の言説に対抗、少なくとも反応、する必要があったと思われるということである。例えば、スウェトナムが、最初に女性が男性の助け手として造られたのは確かにそうで「女は、男が苦労して手に入れたものを使い、消費するのを助けてくれる」（'she helpeth to spend and consume that which man painfully getteth'）[33] と言って被扶養者にすぎない女性を皮肉る時、彼は女性によって即座に言い返され、反発されうる時代に書いていたのである。既に観たようにサワナムに言わせれば女性は男性の不完全性を補う不可欠の「助け手」だったし、スペイトに言わせれば、女性は「助け手にすぎない」（'but an *helper*'）のだから「家事や家庭を維持していく際の全ての重荷を妻の肩にかけてしまう」夫はおかしいということになる。[34]

1643年に出版されたミルトンの離婚論 *The Doctrine and Discipline of Divorce* の要点の一つは、妻は、創世記において定義されているように「ふさわしい助け手」（'a meet help'）であるはずであるから、「自然に、そして継続的にふさわしい助け手ではない」ものは「妻ではない」（'shee who naturally & perpetually is no meet help, can be no wife'）ということであった。[35] 明らかに、これもまた家父長制の言説であって、ミルトンにとっては男性が優位に立った、また立つための論理であった。ところが、17世紀中葉においては、女性達によってこういった言説が転覆させられる状況だったのである。セクト、例えばアナバプティスト派（再洗礼派）や愛の家族（Family of Love）派といった急進的な教派では、夫の命令が神の教えに背く場合、あるいは夫が敬虔なキリスト教徒ではない場合、妻は夫に従う義務はなく、夫のもとを去ることも、他の男性と性的関係をもつことも許されると教えていた。実際に多くの女性が、ブラウンやハリソンのようなセクトの開祖のもとに行くために、夫を離れてオランダに渡ったり、バプティスト派のアン・ウェントワースのように夫のもとを離れてセクトの活動に参加していた。[36] 1646年のトマス・エドワー

ズの『ガングリーナ』は、自分の説教を聞きに来ていた妻子ある男性を誘惑して海外へ逃亡した女説教師アタウェイ婦人について報告している。

> There are two Gentlemen of the Inns of Court, civill and well disposed men, who out of novelty went to hear the women preach, and after Mistris *Attaway* the Lace-woman had finished her exercise, these two Gentlemen had some discourse with her, and among other passages she spoke to them of Master *Miltons Doctrine of Divorce*, and asked them what they thought of it, saying, it was a point to be considered of; and that she for her part would look more into it, for she had an unsanctified husband, that did not walk in the way of *Sion*, nor speak the language of *Canaan*; and how accordingly she hath practised it in running away with another womans husband, is now sufficiently known to Mr.Goodwin and Mr.Saltmarsh.[37]

正に、マーヴェルの時代は、男性中心主義が揺るがされていた時期、女性がかしましく男性に言い返していた時期であったと言っていいであろう。女性を黙らせるための刑具、例えば鉄製のさるぐつわをかまされた女性がピューリタン革命中に多かったのは偶然ではない。[38] 同時代に出版された数多くの反フェミニスト文献は、このコンテクストで読まれなければならない。女性をからかったパンフレットの一つ『御婦人方の国会、新たに制定された彼女らの法律付き』(1647年)の中で話される女性達の反抗的な言葉、

> We have nothing to offend and defend our selves but our tongues ..., which we must maintain for our own safty: though woman was taken out of the side of man, yet let men know, that they cannot, nor shal not alwayes keep us under.[39]

は、しゃべる女性によって家父長制の危機に曝された男性側の恐怖心の裏返しなのである。マーヴェルが「庭」の中で見出した静かな女性、否「美しき静けさ」('Fair quiet, have I found thee here', l. 9)は、庭の外の喧騒、それは政治的革命のみならず女性達によって増幅されていた騒がしさとの著しい対照をなすものであったであろう。1641年に流布したヘンリー・ピーチャムの「世の中は意見によって支配、統治されている」('The World is Ruled and Governed by Opinion')と題されたブロードサイドの絵は、同年の国家検閲システムの中断に伴って溢れ孵った本、パンフレットの類を実らせた「意見の木」を描いている。この印刷物の繁茂が造りだす混沌状態を司る者として描かれているのは、意義深くも、目隠しをされた女性である(図1参照)。[40] また、王制復古後、チャールズ二世がくぐった凱旋門の一つには、壊れた笏と廃墟となった城を頭飾りにした女「混乱」を引き連れて、血糊の付いた剣を手にし、蛇の絡みついた、血色の衣服を身に纏

THE WORLD IS RVLED & GOVERNED by OPINION.

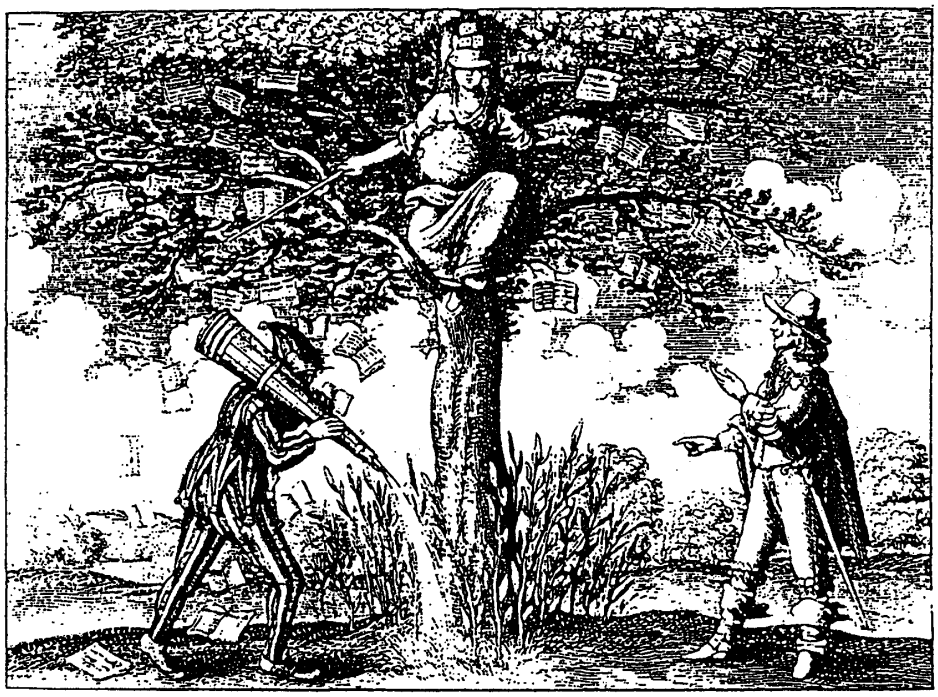

図１　Henry Peacham, "The World is Ruled and Governed by Opinion," 1641

った女性が「反乱」を表象していた。彼女は言う、「私は地獄の娘、サタンの長子」と。[41] 無法と破壊的力を女性に帰する文化においては、革命は、女性によって表象されざるをえなかった。女こそが世界の秩序をひっくり返してしまったのである。

マーヴェルは「オランダの性質」（'The Character of Holland'）で「アムステルダムは、トルコ人でキリスト教徒で異教徒でユダヤ人、／セクトの専売所となり、分派の造幣局となってしまった」（'*Amsterdam, Turk-Christian-Pagan-Jew,* / Staple of Sects and Mint of Schisme grew', ll. 71-72）と言ったが、既に1642年、ジョン・テイラーは「グレート・ブリテンが、宗教を粉々に裂いてしまった気の狂ったセクトがそこから送られて来たアムステルダムになってしまった。」（'*Great Brittaine* turn'd to *Amsterdam* / [from where] mad sects are sent, who have Religion all in pieces Rent'）[42] と言っているし、マーヴェルも「護民官閣下の治世一周年を記念して」（'The First Anniversary of the Government under His Highness the Lord Protector'）の中では、第五王国派（Fifth Monarchy Men）、クェイカー、ランター、アナバプティスト派、アダム派（Adamites）らの多くのセクトに言及している。[43]

そして、このセクト信者の多くが女性で占められていたことは、それについて記した国教会の記録に、「ほとんどが女性」、「男性よりも女性の数が多い」、「大体は愚かな女たち」という表現が多く用いられていることからも、革命期に書かれた分離派を嘲笑する文章には「集会の出席者のほとんどが女性」という言葉が頻繁に見られることからも、また集会に関する現存する分離派

の資料を見ても明らかである。[44] トマス・ジョーダンのバラッド 'The Anarchy, Or the Blessed Reformation Since 1640' も、政治的宗教的喧騒に女性達が参加していたことを示している。

Speak Abraham, speak Kester, speak Judith, speak Hester,
  Speak tag and rag, short coat and long;
Truth's the spell made us rebel,
  And murder and plunder, ding-dong.
    Sure I have the truth, says Numph;
    Nay, I ha' the truth, says Clemme;
    Nay, I ha' the truth, says the Reverend Ruth;
    Nay, I ha' the truth, says Nem.

    ...
    Then let's ha' King Charles, says George;
    Nay, let's have his son, says Hugh;
    Nay, let's ha' none, says jabbering John;
    Nay, let's be all kings, says Prue.[45]

もはや、真理は一つではなく、数多くあり、女性牧師ルースでさえ自分こそ真理を知っていると言い張り、プルーは、キリスト者一人一人が神の油注がれた息子であるからすなわち王であるという清教徒の信念をおうむ返しにしながら女性を含めた全ての人が国王だと主張する。エバが、園の耕作者アダムをその楽園の状態、マーヴェルの言う 'Garden-state' から追い出す原因を造ったが、イギリスという楽園国家 ('Garden-state') を混沌状態に陥れているのも女性に大きな原因があると感じられていたと考えて間違いはない。ジェニー・ゲッズ (Jenny Geddes) は、1637年7月23日日曜日にイギリスの伝説的人物となった。英国国教会の共通祈祷書を強要しようとしていた首席司祭に対して、野菜の行商人にすぎないジェニーが、スコットランド長老派の憤懣を、三脚椅子を司祭の頭めがけて投げつけ、罵倒することで表現したのである。セント・ジャイルズ大聖堂にある彼女の記念銘板は、その事件を半分以上は冗談のような、いわば、風が吹けば桶屋が儲かる式の、それでいてある真理を反映した、清教徒革命の原因として見なしている ('Constant Oral Tradition Affirms / That near this spot / A brave Scotchwoman, Janet Geddes / On the 23rd of July, 1637, / struck the first blow / in the great struggle for freedom of conscience / which / after a conflict of half a century / ended / in the establishment of civil and religious liberty')。[46] 教会の会衆の面前で、聖職者に反抗する女性たちがあちらこちらに現れていた。ト

マス・エドワードの『ガングリーナ』には次のような記事もある。

> The same Lords Day also at a Town within a mile of the other place, a godly Minister being in the Pulpit, and Preaching upon Repentance, pressing it, a woman stood up and said to him openly, that he Preached Lyes and false Doctrine.... Another Minister Preaching in *Colchester* against Schisme, in the time while he was Preaching, a Sectary spake these words with a loud voyce, so as all that stood near were disturbed, *O What a vile wretch is this? O What a Devil is this?* And when Sermon was immediately done, *O What an Enemy of Gods People is this? He hath Preached Blasphemy*: That *he came from the Devil, and to the Devil he would go*: which words she spake aloud. (p.107)

実際、清教徒革命という、旧来の秩序がさかさまになった期間は、女性たちが、男性中心の権威、権力に抵抗し、反乱を起こした期間だと言い換えてもいい。女性たちは、国会にデモを行い、パンフレットを書き、説教し、預言を行った。名もない多くの，階層が低く教養のない、しかしながら神の言葉を伝えるために選ばれたと信じた、騒がしい女性たちをたとえ除いたとしても、先ほどのアタウェイ婦人は、神から聖霊をそそがれて、半時間祈りを捧げた後で45分ばかり聖句の講釈を行ったし、第五王国派のアンナ・トラップネル（Anna Trapnel）は、緊張性の神がかり状態になると一時に何時間も何日もしゃべり続けたし、「聖職者」「イエス・キリストの僕」と自らのパンフレットに記した、同じく第五王国派のメアリ・ケアリー（Mary Cary）、や無律法主義のランター（喧騒派）であるベドフォード州ポトンのウィリアム・オースティン婦人（Mrs William Austin of Potton）、水平派のキャサリン・ハドレー（Katherine Hadley）、エリザベス・リルバーン（Elizabeth Lilburne）、捕えられた水平派の自らの指導者開放の為、当局を怒鳴りつけ、裁判中に判事を大声で非難したメアリ・ドーマン（Mary Dorman）等だけでも充分、保守的な男たちにはうるさかっただろうし、自分の意見を述べる女性の出現を社会は脅威と感じたことは間違いない。[47]

マーヴェル、そして「庭」で表現された彼の女嫌いの言説との関連で重要なのは、圧政的立法者や法律家や貴族、不正な税金に対して、女性であっても抗議する権利があり、市民として聴いてもらう権利があると主張した水平派の女性達の造りだしていた喧騒である。男たちにとって彼女らの主張の内容は問題ではなかった。ただ、女性の発する声は、意味のない、愚かな騒音にすぎず、彼女らは、ただのお喋り女、がみがみ女、じゃじゃ馬の大群であった。1640年代の後半から50年代始めにかけて、彼女らは度重なる陳情のデモを行った。例えば、1649年５月の陳情は、ジョン・リルバーンらを始めとする指導者の釈放を要求し、軍事政権と独裁に対して、景気低迷と物価高騰、食料不足、失業、什分の一税、消費税、独占等に対して抗議した。が、その反応は、

伝えられるところ1万人の署名を集めて500人によって届けられた4月23日から25日の陳情書の回答が典型的なものだった。議会側は、言葉を持つべきではない女性たちによる陳情書に回答を出す必要はない、彼女たちの夫に回答するから帰宅して家事に専念するようにと命じたのである。勿論、これには、さらに女性たちの側からの抗議書が続くことになるが、彼女らの戦闘性は、或る女性がオリヴァ・クロムウェルの服を掴んで彼を放さず、ものすごい勢いで政治のお説教をしていたと伝えるものがいるほどであった。[48] マーヴェルが、投獄されたラヴレイスの為に反乱を起こした女性たちを描いている詩行（'They all in mutiny though yet undrest / Sally'd, and would in his defence contest', 'To his Noble Friend Mr. Richard Lovelace, upon his Poems', ll. 39-40）に通じるものがあるだろう。

マーヴェルの「庭」がフェアファックス卿と関わっているとすると、詩人の女嫌いは、水平派嫌いと密接に関連してくる。1649年バーフォードでフェアファックス卿が最終的に水平派を鎮圧した後もジェラード・ウィンスタンリー率いる、ディガーズと呼ばれる真正水平派たち（True Levellers）がセント・ジョージズヒルを根拠地として活動を続けていた。彼らの信じるところとは、既にウィンスタンリーが「ノルマンの軛」説を根拠として、マナー領主の傲慢と貪欲に対する批判を展開していたように、また、彼らがフェアファックス卿への度重なる手紙の中でも明らかにしているように、ノルマンの征服以来長らく王制によって専有されていた一般民衆の土地は、国王処刑後、共有地（'the common land'）として民衆の手に戻るはずであるということ、そして、彼らのパンフレット『イングランドの貧しき抑圧された民衆の宣言』（*A Declaration from Oppressed People of England*, June 1649）の中で明瞭に示されているように、「大地は我々のためにもあなたたちのためにも造られたものである」という、土地専有の自由を主張する基本的な信念である。[49] 当然、彼らのこの信念は、アップルトン屋敷の所有者にとっても、カントリーハウスを歌うジャンルの中で安定と階層制と所有権とに基づく秩序を讃えて、その所有者を喜ばせようとしていた詩人にとっても脅威であったはずである。彼らの反囲い込み運動、平等主義は、マーヴェルの「アップルトン屋敷によせて――我がフェアファックス卿へ」（'Upon Appleton House, to my Lord Fairfax'）の中で、所領の牧草地が、「水平派がお手本にする、／この裸の等しく平らな土地」（'this naked equal Flat / Which *Levellers* take Pattern at', ll. 449-450）という詩行に、彼らの言葉を、彼らが近い将来、「谷が山と水平になって横たわる時、素晴らしい共同体を目にするだろう」という、彼らのパンフレットの一つに書かれた預言の言葉を、ほぼ引用する形ではっきりと表されている。[50]

「庭」と同じように、アップルトン屋敷の庭もエデンの園の至福の状態と始祖の堕落に言及しているが、歴史の流れの中で描かれた後者は、「庭」よりもさらに明瞭に庭をイギリス国家に重ね（'Oh Thou, that dear and happy Isle / The Garden of the World ere while', ll 321-323）、堕落後の世界と革命の戦乱の世界とを重ねようとしているように思われる（'What luckless Apple did

we tast, / To make us Mortal, and The Wast?', ll. 327-328)。D.C.アレンらが気付いたように、牧草地の洪水の場面や草刈り人たちの収穫の場面が、革命戦争時の逆さまの、血なまぐさい世界を表していることは明らかであるから、[51] 草刈り人らが水平派を表していることと考え合わせると、クイナを刈ってしまう場面にマーヴェルが、テステュリスを登場させているのは興味深い。

> ... bloody *Thestylis*, that waites
> To bring the mowing Camp their Cates,
> Greedy as Kites has trust it up,
> And forthwith means on it to sup:
> When on another quick She lights,
> And cryes, he call'd us *Israelites*;
> But now, to make his saying true,
> Rails rain for Quails, for Manna Dew.
>
> (ll. 401-408)

マーヴェルは、草刈り人たちに破壊的なセクト集団、水平派を重ねることで、さらに彼らの乱暴さを強調することで、彼のパトロンであるフェアファクス卿のような財産所有者の権利を擁護する言説を作りだしているのであるが、ここで注目しなければならないのは、楽園喪失の原因、女性の存在である。テステュリスは、詩の話者に向かって皮肉に言い返す、詩の中で唯一の独立した声を持たされている。「あんたが、わたしらのことをイスラエルの民だと言うのなら、あんたの言葉を現実にしてあげようじゃないの。雨あられと降らせてあげるわ、ウズラの代わりにクイナで、マナの代わりに露だけどね。」彼女は「革命戦争時の宗教セクトの女性に似ている」とクリスティーナ・マルコムソンは指摘している。[52] マルコムソン自身は、この議論に深入りしていないが、例えば、1641年に『キリストの独立教会の弁明』と題されたパンフレットを女だてらに書いてトマス・エドワーズに口答えした、分離派、水平派のキャサリン・チドリー（Katherine Chidley）のことを想起すればよいかもしれない。

キャサリンは、エドワーズの聖書の読み方が正確性を欠くと言って攻撃し、彼自身を「有罪の者たちの過失故に無実の者たちを苦しませる残忍な男」（'a bloody minded man, that would have the innocent suffer for the faults of them that are guilty'）と言ったことを想起すれば、マーヴェルの描いた、無実のクイナを大量に殺し、聖書を自己流に曲げて引用する 'bloody' テステュリスは、キャサリンを皮肉ったかたちで表されていると言えるかもしれない。また、キャサリン・チドリーの攻撃の情け容赦しない、妥協しない性質は、彼女のパンフレットの序文に使われた、女預言者デボラが登場する士師記第４章からの引用に見て取ることができる。「しかし彼［シセ

ラ] が疲れて熟睡したとき、ヘベルの妻ヤエルは天幕のくぎを取り、手に槌を携えて彼に忍び寄り、こめかみにくぎを打ち込んで地に刺し通したので、彼は息絶えて死んだ」(第21節)。[53] こうして、イスラエルの民を守ろうとするヤエルに重ねられたキャサリンの正義を、マーヴェルは再度、ここでもクイナを串刺しにする('trust it up')'bloody' な、残忍なテステュリスとだぶらせているようである。キャサリンの饒舌ぶりを皮肉るようにエドワーズは次のような記事を報告している。

> Katherine Chidley ... with a great deal of violence and bitternesse spake against all Ministers and people that meet in our Churches [at *Stepney*].... Mr. Greenhill answered her by Scripture, and laboured to reduce to a short head all she had spoke, asking her if this were not the sum, namely, that it was unlawfull to worship God in a place which had been used or set apart to Idolatry, under the Names of Saints and Angels; she would not hold to the stating of the question, but running out, Mr. Greenhill to convince her, told her that all *England* in this way and manner had been set apart to *St. George*, and *Scotland* to Saint *Andrew*, and so other Kingdomes to other Saints; so that by her grounds it was unlawfull to worship God in these, and so by consequence anywhere in the world; but in stead of being satisfied or giving any answer, shee was so talkative and clamorous, wearying him with her words, that he was glad to goe away, and so left her. (pp.107-108, mispaged as pp.79-80)

ここで我々の関心にとって重要なのは、フェミニスト批評家が注目するような、新しい女性としてのキャサリン・チドリーの実際の人柄や彼女の説く教義の内容ではなく、エドワーズのような保守的な男性にとって、彼女のような自己主張をする女性がどのように感じられたか、ということである。男性の理性的論理的構成能力をもってして、話された事柄を整理しないと理解が困難な話をただまくしたて、結局のところ理屈では説得することができず、戻ってくる言葉は答えにもならずうるさいだけ。彼女のいないところへ行くことができるのが喜ばしいことに思える、そんな女なのである。

ジョン・ヴィーカーズは、『飾にかけられた分離派たち』(1646年)で、エドワーズと同じように、同時代の主婦たちのお喋りぶりに呆れている。

> Is it a miracle or a wonder ... to see bold impudent housewives, without all womanly modesty, to take upon them (in the natural volubility of their tongues & quick wits, or strong memories only) to prate (not preach or prophesy) after a narrative or discoursing manner, an hour or more, and that most directly contrary to the Apostle's inhibition ...?[54]

ヴィーカーズの、そして数限りなく家父長制の言説の拠り所とされてきた典拠、使途パウロの「婦人たちは・・・黙っていなければならない」という訓戒は、「エペソ人への手紙」の中で与えられた彼の言葉と表裏一体であった。すなわち

> 妻たる者よ。主に使えるように、自分の夫に使えなさい。キリストが教会のかしらであって、自らは、からだなる教会の救主であられるように、夫は妻のかしらである。（第５章第22-23節）

という男女間の力関係が壊される、また壊される脅威を男性側が感じた、時、異端を唱える女性は、異端であるというよりもむしろ女性であるということで排除されたのである。例えば、ダニエル・ロジャーズの書いた結婚手引き書『結婚の誉れ』（1642年）は、女性の書いたものや説教の内容に問題があるのではなくむしろその社会的脈絡や書くこと、説教すること自体の意味が問題なのだと主張している。説教し、預言し、書く女性は、「少しも恥じずに・・・彼女らの夫に全く服従するという馬勒をかなぐり捨ててしまっている」し、たとえ彼女らの言うことが否定できず霊的に穏当なものであったとしても、権威を不当に奪っているわけだから、彼女たちはそれでも悪魔の軍勢にくみしていることになる。「そのような、沈黙と服従という範囲内に留まって自制できない女性のあつかましさと傲慢さを、私は認めるどころか、根拠のない、神に従わない者として許さないとここに公然と断言する。」と言うのである。[55] キャサリン・チドリーが、

> what authority [the] unbeleeving husband hath over the conscience of his believing wife. It is true he hath authority over her in bodily and civill respects, but not to be a Lord over her conscience; and the like may be said of fathers and masters. (*The Justification*, p.26)

と書いたり、もしくは、

> since we are assured of our creation in the image of God, and of an interest in Christ equal unto man, as also of a proportionable share in the freedoms of this commonwealth, we cannot but wonder and grieve that we should appear so despicable in your eyes as to be thought unworthy to petition or represent our grievances to this honourable House.[56]

と宣言し、行動する時、家父長制社会の秩序を脅かす彼女らに代表されるがみがみ女たちを男性が嫌悪するのは極めて自然な反応であったはずである。

注

33. Joseph Swetnam, *The Arraignment of Lewd, Idle, Froward, and Unconstant Women*, rpt. in Katherine Usher Henderson and Barbara F. McManus, *Half Humankind: Contexts and Texts of the Controversy about Women in England, 1540-1640*, p.193.
34. Rachel Speght, *A Mouzell for Melastomus*, p.12.
35. John Milton, *Complete Prose Works of John Milton*, ed. Don M. Wolfe, 8 vols. (New Haven: Yale U. P., 1953-82), ii, ed. Ernest Sirluck, p.309.
36. 楠　明子『英国ルネサンスの女たち　シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』246、247、284、287頁。
37. Thomas Edwards, *Gangraena: or A Catalogue and Discovery of many of the Errours, Heresies, Blasphemies and pernicious Practices of the Sectaries of the time, vented and acted in England in these four last years* (London, 1646), The Second Part, pp.10-11, The Third Part of the Book, An Appendix, p.120.
38. 楠　明子『英国ルネサンスの女たち　シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』81頁。
39. *A Parliament of Ladies: with Their Lawes Newly Enacted* (London, 1647), sig. A3^{V}.
40. Sharon Achinstein, 'The Politics of Babel in the English Revolution', in *Pamphlet Wars: Prose in the English Revolution*, ed. James Holstun (London: Frank Cass, 1992), pp.16-21を参照せよ。Hollarによって描かれたこの絵については、M. Dorothy George, *English Political Caricature: A Study of Opinion and Propaganda*, 2 vols. (Oxford: Clarendon, 1959), i, 25-26. を見よ。
41. Antonia Fraser, *King Charles II* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1979), p.198.
42. John Taylor, *Mad Fashions, Od Fashions, All out of Fashions, or The Emblems of these Distracted times* (London: John Hammonds, 1642), p.6. トマス・エドワーズも『ガングリーナ』(1646年)の中で 'This Land is become already in many places a *Chaos, a Babel, another Amsterdam*, yea, worse; we are beyond that, and in the highway to *Munster* (if God Prevent it not).' (p.120)と述べている。
43. 急進的セクトと1640年代の出版物の氾濫との関係は、Christopher Hill, *The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution* (London: Allen Lane, 1993), p.198を見よ。
44. 楠　明子『英国ルネサンスの女たち　シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』284頁。Stevie Davies, *Unbridled Spirits*, p.28, and passim.
45. *Political Ballads of the Seventeenth and Eighteenth Centuries*, vol.1, ed. W. Walker Wilkins (London: Longman, Green, Longman & Roberts, 1860), lines 23-30, 59, 62.
46. Stevie Davies, *Unbridled Spirits: Women of the English Revolution: 1640-1660*, p.15.

47. 同上、pp.104, 32, 7, 31, 71, 72. 1640年代の女性の説教の遍在傾向については、楠　明子『英国ルネサンスの女たち』285頁を見よ。トマス・エドワーズは『ガングリーナ』の中で124番目の異端教義として、'That 'tis lawfull for women to preach, and why should they not, having gifts as well as men? and some of them do actually preach, having great resort to them.'（p.30）と書いている。

48. 楠　明子『英国ルネサンスの女たち』295頁、Stevie Davies, *Unbridled Spirits*, pp.68-69, 78. Ann Marie McEnteeによると、1649年から1653年の間に政府に対する女性の請願者は、効果的な修辞を見出す試みの中で、自信に満ちた自己表現を捨てて故意に自己卑下を装った言説にシフトしていると言う。聞いてもらうために女性らしい謙遜さを利用するようになったというのである（'"The [Un] Civill-Sisterhood of Oranges and Lemons": Female Petitioners and Demonstrators, 1642-53' in *Pamphlet Wars: Prose in the English Revolution*, ed. James Holstun, p.107）。

49. フェアファックス卿への手紙に関しては、例えば、Gerrard Winstanley, 'To My Lord Generall and His Councell of Warr', in *The Works of Gerrard Winstanley*, ed. George Sabine (Ithaca: Cornell U. P., 1941), p.347を見よ。土地専有に関しては、菅原秀二「クロムウェルとウィンスタンリ―コモンウェルスの形成に向けて」、田村秀夫　編著『クロムウェルとイギリス革命』（埼玉、聖学院大学出版会、1999年）104頁。同論文は、ディガー運動で掲げられた要求が、内乱での戦友である議会のジェントリ、すなわち領主、の囲い込み地には敢えて挑戦するものではなく、「共有地、荒蕪地、没収地（即ち、「国王派の土地」）、に限定されていた」ことを指摘している（103、105頁）。

50. 'A Mite Cast into the Common Treasury', in The *Works of Gerrard Winstanley*, ed. George Sabine, p.659.

51. Don Cameron Allen, *Image and Meaning: Metaphoric Traditions in Renaissance Poetry* (Baltimore: Johns Hopkins U. P., 1960), pp.135-137.

52. Cristina Malcolmson, 'The Garden Enclosed / The Woman Enclosed: Marvell and the Cavalier Poets' in *Enclosure Acts: Sexuality, Property, and Culture in the Early Modern England*, ed. Richard Burt and John Michael Archer (Ithaca: Cornell U. P., 1994), p.262.

53. Katherine Chidley, *The Justification of the Independent Churches of Christ* (London, 1641), p.50 ('You have the Scripture but you wring it and wrest it, according to your owne devices, and make of it a nose of waxe, and a leaden rule to leane which way your minde leadeth you;... you have hacked it and mangled it into little lessons,.....), p.61, title page.

54. John Vicars, *The Schismatic Sifted. Or, The Picture of the Independents, Freshly and Fairly Washt-over again* (London, 1646), p.34.

55. Daniel Rogers, *Matrimoniall Honour* (London, 1642), quoted in Hilary Hinds, *God's Englishwomen*, pp.172-173.

56. キャサリン・チドリー、もしくは、ときにエリザベス・リルバーン、が書いたとされる1649年5月の水平派による陳情文の一部である。Stevie Davies, *Unbridled Spirits*, pp.84-85に引用されている。

※この論文は、2000年6月17日に十七世紀英文学会関西支部第139回例会において「マーヴェルの女嫌いの庭　再考」として口頭発表したものに加筆、修正を加えたものであり、平成13年度科学研究費補助（基盤研究Bの2）による研究成果の一部でもある。

The Rib of Adam and Marvell's 'The Garden' (Part II)

Takashi YOSHINAKA

The second part of this paper, (and the third part in the next volume), focusing on the poet's surroundings in the middle of political turmoil of the mid-seventeenth century, propose two other possible causes for his attempt to exclude women from 'The Garden'.

One cause, which I treat in this volume, is that Marvell, seeking after 'Fair quiet' (l. 9) in 'The Garden', wanted to wall off noisy, aggressive women of the radical religious sects swarming and politically active outside his sanctuary. And if 'The Garden' has something to do with 'Upon Appleton House: To My Lord Fairfax', among the targets of his misoginistic jibe must have been intended Katherine Chidley, separatist and Leveller. In the mowers' scene in 'Upon Appleton House', Marvell seems to defend the rights of property owners such as his patron, Lord Fairfax, against the radical claims of the Levellers and Diggers by letting the mowers reflect those disruptive sects and playing up their violence. The paper points out that Thestylis in 'Upon Appleton House' obliquely reminds the reader of some of the words and images which Katherine Chidley uses in her pamphlet, *The Justification of the Independent Churches of Christ* (1641). For example, when Thestylis barbarously trusses the rail up, Marvell is appropriating Judges 4:21 with which Chidley prefaced her work, and emphasizing the violent and cruel side of Jael's heroic deed of piercing Sisera's temples with a stake.